

若木考古誌

第 97 号

国学院大学
考古学会

縄文時代の加工食品炭化物

研究史および事例の集成

中村耕作

一 はじめに

國學院大學考古學會は、二〇〇〇年度の若木祭において、いわゆる「縄文クッキー」を取り上げた。本稿では、その際に収集した資料をもとにその集成と研究の現状をまとめたい(註1)。

二 研究の歩みと現状

本稿では「縄文クッキー」「クッキー炭化物」などと呼ばれる食べ物が炭化した遺物を加工食品炭化物と総称する(註2)。

この種の遺物が始めて発見されたのは一九六一年、曾利遺跡においてであった(図1)。当時、ここは藤森栄一氏による縄文中期農耕論の舞台であり

加工食品炭化物はその有力な証拠として、他の根拠とともに國學院大學で開催された日本考古学協会総会において発表された(註3)。成分分析で栽培植物が検出されることが期待されたが直良信夫氏による観察の結果、カタバミとササの核らしいものが検出されたのみである(註4)。桐原健氏による数種の野生植物の調理実験などの研究はなされたもの(註5)。その後、藤森氏は、栽培植物の発見よりも考古学的状況証拠を重視することを明言し、縄文農耕論における加工食品炭化物の意義は低下することになる(註6)。

一九七二・七三年に調査が行われた



図1 曾利例(註20)

沖ノ原遺跡では、大形住居から多数の加工食品炭化物が出土し注目された。渡辺誠氏は、この建物の性格を雪国における冬季の共同作業場と推定したが加工食品炭化物の出土がその根拠の一つとなっていた(註7)。これは季節的な生活サイクルや食生活の社会的側面に関わる視点として興味深い(註8)。

沖ノ原遺跡の報告書が刊行された一九七七年には、坊主峠遺跡、伴野原遺跡の事例が紹介された。後者は、石囲炉の灰の中から発見されたもので、その調理法を考える上で貴重な事例として注目された。これらの成果をうけ、渡辺誠氏は概説書で、植物澱粉製法の確立とその利用法という観点から加工食品炭化物を説明している(註9)。

一九八二年、荒神山遺跡から出土しアワと同定されていた「炭化種実塊」

国際化と言えば、気軽に海外旅行に行くことしか認識してこなかった日本人の多くも、よつやく国際化がバラ色の側面だけではないことを肌で感じてきているようだ。先日、「地上の天国」に拉致された被害者家族の内、五人が帰国を果たすことができた。しかし、被害者の二十数年は永遠に取り戻すことができないのである。最近のニュースによれば、そんな北と韓国との軍事境界線近くから三百基に及ぶ高句麗の墳墓群が発見されたという(ソウル五月十七日共同)。もちろん、そこに眠る人々も、決して安寧な日々を送っていたわけではない。この墳墓群が営まれたのは、五世紀の末から六世紀のはじめにかけてと報じられているが、それは高句麗の南下と百済の後退が著しくなってきた時期にほかならないのだ。韓国内最大規模の新発見ではあるが、平和裡に彼の地を踏査できる日の訪れを祈らずにはいられない。



鏡

表 縄文時代の加工食品炭化物一覧

遺跡名	所在地	時期	名称・出土状況・形状・その他
1 忍路土場遺跡	北海道小樽市	後期	「パン状炭化物」6号作業場跡(7ヶ所中最大規模で木製脚付皿形容器・台板・繊維製品などを伴う)より出土 二枚貝(ウバリガイ)の痕 種子状の粒あり
2 熊ヶ平遺跡	青森県川内町	前期	「食品炭化物(クッキー状炭化物)」第1号住居中央部のピット上(火焚跡?)より出土(4.7×3.1×2.3) 第3号住居近くの遺構外出土(5.0×3.9×2.8cm) 共に繊維質のものは認められず、粉状のものを固めた可能性あり
3 坊主峠遺跡	岩手県北上市	中期	「ダンゴ状炭化物」2号-C住居(火災にあった住居)出土 6.0×4.0×3.5cm、5.3×3.5×3.0cm、4.0×3.5×3.5cm 粉を固めたものごとく緻密で粒・線は確認できない
4 馬場平2遺跡	岩手県一戸町	中期	「パン状炭化物」C9住居のD層出土 5.0×5.0cm の円形 全面に縞状の線が付き、その線に沿って一部割れている
5 上ノ山2遺跡	秋田県協和町	前期	「炭化遺物」SI190号大形住居跡より出土 2点 表面には小さな凹凸が認められ、材料を細かく切ったことが伺える。表裏に指の痕あり
6 川口遺跡	山形県村山市	後期	「パン状炭化物」包含層内出土(10cmほど)
7 渡戸遺跡	山形県天童市	後期	「クッキー状炭化物」泥炭層より出土 3cmほど 後期中葉
8 押出遺跡	山形県高島町	前期	「クッキー状炭化物」約20点 13号住居、11号住居(大形長方形)の床面・転ばし根太直上で出土 径3cm~5cm 渦巻沈線文様または掌痕あり オープン用の石?も出土
9 上原遺跡	福島県二本松市	中期	「炭化物」開発工事中に出土 おにぎりを半分にしたような形状 径8cm、厚3.8cm 裏面に薄板が密着 後世の混入物の可能性も
10 行田大道北遺跡	群馬県松井田町	前期	「クッキー状炭化物」(住居)6号(覆土中3点)・7号(西壁際13点・付近に焼土あり)・8号(覆土中)・10号(覆土中3点)(土坑)・12号(覆土中1点・下層より炭化種子)・243号(覆土中12点)・342号(覆土中32点) 点数は形状の把握できるもののみ 最大長4.5cm、最小長3.0cm この報告では重量も報告されている。諸磯c式期
11 下広岡遺跡	茨城県つくば市	中期	パン状炭化物 59号土坑内(袋状土坑)より出土 4.2×5cm 円形で断面凹形 裏面に棒状加工痕 炭化物・砥石が共伴 阿玉台式期
12 駒木野遺跡	東京都青梅市	中期	「炭化物」11号住居・31号住居の覆土中 表面球状 約20点
13 なすな原遺跡	東京都町田市	後期	「タール状種子塊」113号住居床上より出土 堀之内式期
14 岩野原遺跡	新潟県長岡市	後期	「パン状炭化物」石皿と共に土坑(9N-L20)内より出土長さ11.5cm
15 沖ノ原遺跡	新潟県津南町	中期	「クッキー状炭化物」第1号長方形建物跡出入口付近出土 第3号長方形大形家屋址、第118号住居址からも各1点出土報告書では直径2~4cm・厚さ1cmの扁平なクッキー状、直径2cm前後のダンゴ状、ソロパン状の3種に分類している 約50点
16 大崎遺跡	長野県大町市	前期	(縄文クッキー) 住居床面出土(3×3×1.3cm)
17 荒神山遺跡	長野県諏訪市	前期 中期	「炭化種子塊(固形炭化物)」70号住居(藤内式期 5×2cm)、111号住居床下、123号住居床下より出土(前期末?)
18 大石遺跡	長野県原村	中期	「アワ状炭化種子塊」18号住居(九兵衛尾根式期 床上20cm 2.5×2.5×1.5cm)、19号住居(新道~藤内式期 床直~床上30cm 地点5点 最大4.3×3.2×1.2cm)、24号住居(新道式期 2点 床直~床上75cm 最大1.6×1.3×2.3cm)、25号住居(4点 小指先大)、1241号土坑(覆土1.5×6cm)、1257号土坑(覆土2.0×1.5cm)
19 高風呂遺跡	長野県茅野市	中期	「炭化物」21号住居内出土。成形面一面遺存。この面に整形痕あるいは圧痕と思われる痕跡がみられる。2.8×2.5×1.5cm(03.1.16 功刀氏計測) 曾利1式期
20 水尻遺跡	長野県茅野市	中期	「クッキー状炭化物」1号住居炉周辺土層より出土。泡状の粒子とこねた状況が観察できる。報告時は一つの炭化物塊であったが、現在は五つに破損。3.4×3.0×2.3cm(現在残っている塊のうち最大のもの 03.1.16 功刀氏計測) 猪沢式期
21 曾利遺跡	長野県富士見町	中期	「パン状炭化物」5号住居出土 推定5個コップパン状2点(16.5×10×4.0cm、15.6×10×3.7cm)、捻り餅状1点(13×5×3cm)
22 机原遺跡	長野県富士見町	前期	「カリントウ状炭化物」土坑内より出土 植物の根か?
23 藤内遺跡	長野県富士見町	中期	「炭化食品」9号住居F2炉の隅
24 上前尾根遺跡	長野県原村	中期	「パン状炭化物」47号住居址 曾利3式期 炭化種子塊47号・68住居(曾利1式)から3個各3cm、2cm、1cm 曾利式期
25 月見松遺跡	長野県伊那市	中期	54号住居内ピットより出土 径4cmの形状 井戸尻3式期
26 伴野原遺跡	長野県豊岡町	中期	パン状炭化物 33号住居石囲炉の中より出土 17×17×3cmの円盤状 同住居内より釣手土器出土 曾利2~3式期
27 烏原平遺群 上小用遺跡	山梨県白州町	中期	「パン状炭化物」TH84区1号住居より出土 総重量は117.1g 破片で最大のもの51.6g 種子のような粒を含む
28 花鳥山遺跡	山梨県御坂町	前期	4号住居床面より出土 2×1.5cm 焼けてタール状に固まった種実塊
29 寺所第2遺跡	山梨県大泉村	中期	T6号住居より5cmほどの「パン状炭化物」、T56号住居跡より3×4×0.5cmの「クッキー状炭化物」
30 原平遺跡	山梨県大月市	早期	「パン状炭化物」48号住居内より出土 直径5cmほど C14測定で7150±130BP
31 釈迦堂遺跡群	山梨県勝沼町	中期	「パン状炭化物」(報告書刊行後の整理作業で発見。詳細は未発表)
32 宮之上遺跡	山梨県勝沼町	中期	「パン状炭化物」27号住居覆土炭化物層よりドングリと共に2点出土 藤内式期
33 ツルネ遺跡	岐阜県高山市	中期	「炭化物」第3ピット群P2より 小さな種子が密接集合したタール状の塊 多数
34 峰一合遺跡	岐阜県下呂町	前~中 期	パン状炭化物廃棄遺構内出土 コリ科植物の球根か?

が、松谷暁子氏による走査型電子顕微鏡での観察によりエゴマと同定しなおされ、同時に曾利遺跡の「パン状炭化物」についてもエゴマを含むと報告された(註10)。これを受け長沢宏昌氏はエゴマが検出された炭化種実塊・パン状炭化物等を集成し、その中でエゴマなどの種子を持つものと、表面に粒が見えないものの二者が存在することを指摘している(註11)。長沢氏はその後、寺所第2遺跡出土例の出土をきっかけに、エゴマを含んだ食品の復元およびその炭化実験を行い、炭化種実塊も加工食品炭化物の一種であると推定した(註12)。

渡辺誠氏は一九九九年に植物食に関して概観し、その中でスタンプ形土製品をクッキー状食品の装飾用と推定している。(註13)

一九八七年、中野益男氏らは脂肪酸分析法による山形県押出遺跡出土の加工食品炭化物の分析結果を発表し、その材料組成により、クッキー型とパンバーク型の二類型を提示し(註14)、この結果をもとに一九九六年に宮下健

司氏が復元実験を行っている(註15)。その後、学校や博物館・埋蔵文化財センター等における体験学習では中野氏の分析結果を元にした「縄文クッキーづくり」は人気メニューの一つとなる。

しかし、脂肪酸分析の原材料特定の方法に対する批判的見解は相次いで提示されている(註16)。また一方では中野氏の脂肪酸分析以降、それに任せてきりとなり、考古学的研究はほとんどなされていないという問題がある。今改めてその考古学的研究が必要とされてきているといえよう(註17)。

三、資料集成と若干の整理

考古学的研究の基礎として全国の出土例の把握を試みた。未報告の資料や漏れも多いと思われるが三四遺跡からの出土情報を確認することができた。以下、これらを簡単に整理したい。

《形状と名称》

各遺跡から出土した炭化物は様々な形をしている。報告書の記載名称も、「クッキー状」「パン状」「カリントウ状」「捻り餅状」「だんご状」「そろばん状」等多様である。成分に基づくもの

ではなく、形状の類似に基づく便宜的なものであり、食品としての作り方や味、用途等は異なったものであったことが予想される。

《時期と分布》

現状では原平例の早期末が最古の事例で、前期から後期までの東日本各地に出土例がある。一方で、西日本からの出土例はなく、また東日本でも長野・山梨に集中している(註18)。

《出土状況》

最も多いのが住居からの出土であり、また大形住居からの出土も目に付く。このうち、石囲炉の中から発見された伴野原例や、覆土に焼土を含有する土坑上から発見された熊ヶ平例は調理法を考える上では重要である。

また、土坑からの出土も注目される。特に、岩野原例は石皿にのったままの出土であり、土坑を用いて調理した可能性を伺わせる。その他、作業場、泥炭層等からの出土も確認されている。

《加工(成形・整形)痕跡》

報告書の記載の中には加工痕跡と思われる記述がある。上ノ山例には表裏

文 献 1 北海道埋文セ 1989 『小樽市忍路土場遺跡・忍路5遺跡』道埋文調報 53、2 青森県教委 1995 『熊ヶ平遺跡』県埋文調報 180、3 北上市教委 1977 『だんご炭化物』『季刊どるめん』13、4 一戸町教委 1983 『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書3』町文調報 4、5 秋田県埋文セ 1989・1989 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書2』県文調報 166・186、6 山形県教委 1990 『川口遺跡発掘調査報告書』県埋文調報 51、7 山形県埋文セ 1996 『渡戸遺跡発掘調査報告書』県埋文セ調報 35、8 佐々木洋治 1993 『押出クッキー』『新版日本の古代』1 角川書店、9 二本松市教委 1969 『上原遺跡調査概報』、10 松井田町遺跡調査会 1997 『八城二本杉東遺跡(八城遺跡) 行田大道北遺跡(行田遺跡)』・『松井田町内閣越自動車道(上越線)関連遺跡自然科学分析編』閣越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書、11 茨城県教育財団 1981 『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』2 県教育財団文調報 10、12 青梅市遺跡調査会 1998 『東京都青梅市駒木野遺跡発掘調査報告書』、13 なすな原遺跡調査会 1996 『なすな原遺跡 2 地区調査』、14 長岡市教委 1981 『埋蔵文化財発掘調査報告書 岩野原遺跡』、15 津南町教委 1977 『沖ノ原遺跡発掘調査報告書』、16 中日新聞 99.8.11 『6000年前にもクッキー』、17 長野県教委 1975 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-諏訪市その3-』、18 長野県教委 1976 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-茅野市・原村その1 富士見町その2-』、19 茅野市教委 1986 『高風呂遺跡』、20 茅野市教委 1992 『水尻遺跡』、21 註4文献、藤森栄一 1965 『池袋・曾利遺跡』、『井戸尻』、中央公論美術出版、22 武藤雄六 1980 『カリントウ炭化食品発見の意義』『季刊どるめん』27、23 宮坂・武藤・小平 1965 『烏帽子・藤内遺跡』、『井戸尻』、24 平出一治 1978 『長野県上ノ原尾根遺跡の調査-アワの炭化種子を中心に-』『考古学ジャーナル』147、25 伊那市教委 1969 『月見山遺跡緊急発掘調査報告書』、26 酒井幸則 1977 『パン状炭化物』『季刊どるめん』13 豊丘村教委 1977 『伴野原遺跡』、27 杉本充 2003 『TH84区1号住居址出土「パン状」炭化物』(http://www.asahi-net.or.jp/~rj5m-sgmt/san/tan01.htm)、28 山梨県埋文セ 1989 『花鳥山遺跡-水呑場北遺跡』県埋文セ調報 45、29 北巨摩市町村文化財担当者会編 1996 『寺所第2遺跡』、『八ヶ岳考古』1、30 杉本正文 1998 『原平遺跡』、『山梨県史』資料編1、31 長沢宏昌 1998 『縄文時代遺跡出土の球根類とそのオコグ』、『鳥島の考古学』、32 室伏徹 1990 『宮之上遺跡(第3次)』、『山梨考古』山梨県考古学協会、33 高山市教委 1978 『ソルネ遺跡発掘調査報告書』、34 註2文献



図 2 押出例 (文献 8)

に指圧痕が残る。押出例には表面に曲線文様が見え、紐状にしたものを渦巻状に巻いて成形したことが窺える(図 2)。伴野原例では、表面は滑らかに仕上げ、縁には角をつけるという整形痕跡が確認される。

《加熱痕跡》

押出遺跡では隣接して被熱痕を有する扁平な板石が検出されており、食品の焼成に使用されたものと考えられる。岩野原例では大形の土坑から、小形の石皿に加工食品炭化物が付着した状態で出土した。石皿には被熱痕が確認されている。この二例は石を用いた加熱方法であるが、灰の中で焼かれたと考えられる事例としては、伴野原例、熊ヶ平例がある。また、忍路土場例は残存形状から、二枚貝を利用して焼いたと考えられている。

四 今後の課題と展望

以上の記述は、既刊文献を用いて行ったものである。しかし、今回の集成表に加えた事例の中には、近年の観察で加工食品以外の植物が炭化したものと指摘されている例がある(註 19)。

これは、加工食品炭化物自体の比較検討がなされず、その定義が確立していないことを示すものである。また、一方でバリエーションの存在が渡辺氏や長沢氏から指摘されているが、有効な分類を行うことも必要とされる。ところが、研究の少なさと同様、報告書における記述も少ないのが現状である。ものが多く、十分な検討はできない。

二〇〇二年末、筆者は洞口正史氏・横山千晶氏と共に行田大道北遺跡の加工食品炭化物を観察する機会に恵まれた。その際は詳細な観察はしえなかったが、実測図の公表されていない裏面に工具によると思われる加工痕を認めることができるなど再実測・再撮影の必要を強く認識させられるものであった。今後、他の事例についても同様に細かい観察により新たな情報を明らかに

にしていきたいと考えている。

若木祭での展示ならびに本稿の執筆にあたって次の諸氏からご教示をいただきました。記して感謝いたします。

小松隆史氏、杉本充氏、杉本正文氏、功刀司氏、平林彰氏、壁伸明氏、洞口正史氏、山口昌美氏、横山千晶氏

- 註 1 本稿の元となった若木祭パンフレットは伴場聡・原あゆみ・猪股未来・五十嵐睦の各氏と共同執筆したものである。
- 註 2 「加工食品炭化物」の用語は既に大江上氏が使用している。大江上二〇〇〇「資料紹介 下呂町峰一号遺跡出土の加工食品炭化物について」(一)〜(三)『月刊考古学ジャーナル』四五六〜四五八。
- 註 3 藤森栄一・一九六一、縄文中期農耕存否に関する新資料『日本考古学協会第二七回総会研究発表要旨』
- 註 4 藤森栄一・武藤雄六一九六四「信濃境曾利遺跡調査報告」『長野県考古学会誌』創刊号
- 註 5 桐原健一九六五「パン状炭化物についての一、三の実験」『井戸尻』中央公論美術出版
- 註 6 藤森栄一一九七〇「縄文中期植物栽培の起源」『縄文農耕』学生社
- 註 7 渡辺誠一九七五「縄文時代の植物食」『雄山閣出版』同「一九七七」集落の構成『沖ノ原遺跡発掘調査報告書』
- 註 8 小川望氏は共食の場とみている。その後同様の建物が一定の普遍性をもって分布していることが明らかになり、共同

家屋説が強く唱えられるようになってきている。小川望一九八九「縄文時代の大型住居について(その 2)」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』八、武藤康弘一九八五「縄文集落研究の動向」『民俗建築』八七、菅谷通保一九八七「縄文時代特殊住居論批判」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』六、武藤康弘一九八八「縄文時代の大型住居」『縄文式生活構造』同成社

註 9 渡辺誠一九七三「食生活の変遷」『古代史発掘』二 講談社 同「一九八二」『縄文時代各期主要穀果類とパン状炭化食品出土遺跡の分布』『日本歴史地図 原始古代編(上)』柏書房 同「一九八三」炭化食品『縄文時代の知識』東京美術

註 10 松谷暁子一九八二「灰像と炭化像による縄文時代の作物栽培の探求」『月刊考古学ジャーナル』一九二、同「一九八三」『エゴマ・シソ』『縄文文化の研究』二 雄山閣出版 同「一九八四」『走査電顕像による炭化種実の識別』古文化財の自然科学的研究。のち伴野原遺跡例についても同様の結果が出された。松谷暁子一九八八「長野野原の縄文中期諸遺跡から出土したエゴマ・シソ」『長野県史』考古資料編

註 11 長沢宏昌一九八九「縄文時代におけるエゴマの利用について」『山梨考古学論集』

註 12 長沢宏昌一九九九「エゴマのクッキ」『山梨考古学論集』

註 13 渡辺誠一九九九「縄文人のくらし 植物食を中心に」『企画展よみがえる縄文人』ミュージウム氏家

註 14 福島道広・中野寛子・中岡利泰・中野益男・根岸孝一九八八「残存脂肪酸析法による原始古代人の生活環境復原」『日本農芸化学会誌』六一 一一九、中野益

男一九八九、残留脂肪酸による古代還元
 『新しい研究法は考古学になにをもちら
 したか』クバプロなど。なお押出例につ
 いては正式な発掘調査報告書や脂肪酸分
 析結果の正式な論文は発表されていない。
 註15 宮下健司一九九六、縄文食に関する
 理化学的研究の動向、『長野県立歴史館
 研究紀要』二

註16 坂井良輔・小林正史一九九五「脂肪
 酸分析の方法と問題点」月刊考古学シヤ
 ーナル 三八六、難波純二・岡安光彦・
 角張淳二二〇〇一「考古学的脂肪酸分析
 の問題点」日本考古学協会第六七回総会
 研究発表要旨、山口昌美二〇〇二「考古
 学の残存脂肪酸分析と食の問題」(前編・
 後編)『食の科学』二九五、二九六

註17 『Genal Objects』埋文・考
 古揭示板過去ログ集 縄文クッキーをめ
 ぐり http://www.dl.dn.ne.jp/~pob
 /it_gw/arch/board/board_d.htm 岡安光
 彦二〇〇三「小・中学校で人気の縄文ク
 キー作り 科学的根拠に強い疑問」
 『朝日新聞』三月七日夕刊

註18 長沢氏(註11文献)が指摘するよ
 うに、中部高地の研究者の植物利用につ
 いての関心の高さも関係するだろう。

註19 峰一合例は、註11文献、註2文献
 によってヨリ科植物の球根の炭化物であ
 ることが指摘されている。駒木野例は、
 「クッキー状炭化物」と報道されたが報
 告書では単に「炭化物」とのみ記してい
 る。机原例は小松隆史氏の「ご指示による
 と植物の根が炭化したものの可能性が高
 いということである。上原例は、報告書
 で後世の混入の可能性が指摘されている。
 註20 東北歴史博物館二〇〇〇『縄文時代
 の日本列島』

(博士課程前期一年)

「黄門様の考古学」聴講記

小池利春

去る五月十五日土曜日、栃木県立な
 す風土記の丘資料館学芸員の真保昌弘
 氏による日本文化研究所春季学術講演
 会が開催された。「黄門様の考古学」と
 題され、一六九一年に行なわれた水戸
 光園公による上・下侍塚古墳の発掘調
 査が主な内容であった。

さて、水戸黄門というく、老人で髭
 をたくわえ、お供の介さんと格さんを
 従え、全国諸藩を行脚し、悪事を暴き
 それを裁き、一件落着と高笑いする、
 といったような姿を思い浮かべられる方が
 多いと思うが、そのような事実は全く
 なく、それは時代劇の中だけの姿だと
 いう。

光園公の歴史学に関する業績として
 『大日本史』の編纂と、文化財保護事
 業の二つが挙げられる。まず前者であ
 るが、光園公三〇歳の頃に開始された
 もので、全三九七巻に渡り、明治三九

年に完成、二五〇年もの歳月を費やし
 て編纂されたものである。刊行にあた
 り「史局」と呼ばれる専用の編纂所を
 設けたといふから光園公の熱の入れよ
 うが窺える。『大日本史』編纂にあたっ
 ては介さんこと佐々宗淳が全国の史料
 調査を行なっており、光園公が歴史資
 料を重視していたことが分かる。

後者の文化財保護事業もそうした姿
 勢の延長線上に位置するものであり、
 その顕著な例として挙げられるのが今
 回のメインテーマとなった上・下侍塚
 古墳の事例である。発掘は古碑の碑文
 に見える那須国造の名を解明する為
 に行なわれた。目的は達しなかったが、
 実測図とはいえないまでも出土品のス
 ケッチと注記が記録されており、西古
 墳の図も残っている。また出土品は全
 て松の木箱に入れられ、釘付けの上
 松脂で密封されて、再び両古墳に埋め

戻されたとされている。その後、発掘
 の発端となった那須国造碑の為に碑堂
 を建て、水戸藩が代々それを管理して
 いたというのは驚きであった。

講演会の企画者である杉山林継教授
 が、目的のある調査と記録、その後の
 保存処置という点で、学術調査のはし
 りである」とおっしゃっていたのは印
 象深い。

当日は、一般の方も多数来聴され、
 水戸光園公の知られざる一面に興味深
 く聴いていた様子であった。

なお、この秋には真保氏の属するな
 す風土記の丘資料館湯津上館において
 「水戸光園公の考古学」と題した企画
 展が開催されるという。関心のある方
 はぜひとも観覧されたい。

(学部二年)



下侍塚出土品(『下野国誌』)

新刊紹介

新原 佑典

『國學院大學二一世紀COEプログラム二〇〇二・二〇〇三年度考古学調査研究報告 東アジアにおける新石器文化と日本』(考古学シリーズ2)

本書は國學院大學二一世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」基層文化としての神道・日本文化研究グループ考古学班により行われた調査の報告書である。考古学班は、東アジアにおける狩猟採集社会の文化と縄文文化研究班(縄文班)と、東アジアにおける農耕社会の文化に関する研究班(弥生班)と、そし



て神道との合同プロジェクトである「東アジアにおける青銅器祭祀に関する研究班(鏡班)」とからなる。平成一四年度より研究体制の確立を図るとともに、各班における定例研究会の中での予備研究や調査準備によつて、問題意識の発揚・深化を目指した。また若手研究者を中心とした研究集会を開き、意見交換を行つてきた。

昨年一二月には合同で国際シンポジウムを開催。同様の研究課題に取り組み各地の第一線の研究者を招き、研究発表と討議をし、現在までの本学考古学班の調査・研究成果を総合的視野から中間総括した。ここでは東アジアの新石器文化について幅広い論議がなされ、大きな成果を挙げた(註1)。本書の第一部において、以上のような活動の概況を報告する。

縄文班は日本列島の縄文文化に世界的な位置づけを与えるべく、ロシア沿海地方のオシノフカ遺跡およびゴルバトカ3遺跡の発掘調査を行った。本書第一部はその成果報告である。オシノフカ遺跡より出土したルドナヤ文

化期の土器(いわゆるアムール網目文土器)に与えられた約七千年前という年代は縄文時代早期から前期に相当し、それを傍証するように縄文時代早期の女満別式土器と、施文方法と文様の点で酷似しており、列島と沿海地域の交流の様子が想起される。今年度以降も調査が予定され、さらなる成果が期待される。また今回の発掘調査は、国内

においては数箇所のフィールドを有し長期に亘つて発掘調査を行つている本学にとつて初の本格的な海外発掘調査であり、その点でもこの調査の持つ意義には少なからぬものがある。

弥生班・鏡班はそれぞれ、部において調査報告を行つている。弥生班は本来、中国での調査を予定していたが、SARSの影響によつて急遽、国内調査に変更したものである。弥生時代社会の祭祀遺物である分銅形土製品に着目、岡山県吉備地方における調査

では一二五点を発見した。報告では研究史を紐解きつつ分類の枠組みを捉え直し、編年を行つたうえで吉備地方における分銅形土製品の在りかた、ひい

ては弥生時代社会における分銅形土製品の位置づけをさぐる。鏡班は九州地方において多鈕細文鏡調査を行つたが、その詳細な観察に基づき面径や製作技法といった新たな視点を提示し、さらに研究動向と問題点をトレースした上で、本年度行われる国内調査、また韓半島調査への展望をみる。

本書は調査成果報告に留まらず、国内外の研究者よりの論文を採録、狩猟採集社会、農耕社会の多角的な追究に努める。

このプログラムは本年度にその三年目を迎える。縄文・弥生・鏡の各班による調査研究は軌道に乗り、それぞれに深化をみせていくものと思われる。その上で「東アジアの新石器文化」の研究のため、このプログラム全体としての成果に大きな期待を寄せたい。

二〇〇四年三月 A4版 三八〇頁

註1 予稿集『國學院大學二一世紀COEプログラム国際シンポジウム予稿集 東アジアにおける新石器文化の成立と展開』(考古学シリーズ)、二〇〇三年二月刊

「動向」

会員消息

小林寛子氏 さいたま市遺跡調査会調査員 平成一五年四月、

学内動向

四月二四日(土) 先史考古学談話会の論文発表会が開催され、卒業論文三本・修士論文三本・博士論文一本の発表が行なわれた。

中村耕作「縄文時代後期における葬墓制の研究」

中野幸大「大木 8a 様式土器の研究」
五十嵐睦「糸魚川地域における硬玉製大珠 製作工程の分析」

村端和樹「広郷型細石刃核の形態認識について」

藤田征史「北海道細石刃石器群における石器製作」

手塚美穂「縄文社会についての一考察」

阿部昭典「縄文時代中期末葉〜後期前葉の文化変化」

五月二五日(土) 國學院大學日本文化研究所主催の「近世学問を検証する

近代ヨーロッパ Archaeology 日

本上陸以前の考古学的学問・国学者に光をあてる「シリーズの二回目として眞保昌弘氏による「黄門様の考古学 一六六二年光圀上侍塚を

発掘調査する」が開催された。詳しくは聴講記を参照されたい。

五月一九日(水) 文学部講演会としての朱延平氏による「赤峰市における最近の考古学調査 祭祀を中心として」が開催された。

五月二八日(金) 大学院の新生歓迎会が行われた。今年は博士課程前期に一名、後期に六名が進学した。

五月二九日(土) 二二世紀 COE フログラム(神道部門)の一環として、古代の神社「島根県青木遺跡研究集会」が開催された。発表者は松尾充

晶氏、錦田剛志氏、笹生衛氏、早川万年氏、コメンテーターは牟禮仁氏、藤森馨氏、小倉慈司氏、川原秀夫氏、

杉山林継氏で、岡田莊司氏がコーディネーター・司会をつとめた。

活動日誌

四月五日、 新入生への勧誘を行い、

七名の新入会員を迎えた。

四月一九日(月) 新入生と学部会員との親睦を深めるため鍋パーティーを開催した。

四月二三日(金) 第一回例会

平成一六年度の年間計画を策定し、自己紹介を行なった。

五月七日(金) 第二回例会

「考古学を学ぶにあたっての心構え」岩崎厚志助手

五月八日(土) 新入生歓迎会 一次会をキッチンカフェ、二次会を千両にて開催した。

五月一四日(金) 第三回例会

入門講座「考古学とは何か」森下直人(学部二年)、入門講座「学史」小池利春(学部二年)、

五月二八日(金) 第四回例会

入門講座「編年」羽山浩道(学部二年)、入門講座「層位学」石船康治(学部二年)、

五月三二日(月)『若木考古』第九七号発行

発行

この他、毎週火曜日には、たまプラーザ部室にて勉強会を行っている。

編集後記

二百余名の学部生・大学院生と六十余の考古学関係科目を有する國學院の考古学であるが、キャンパスや実習地等の分化により相互の関係は弱体化している。先輩兄弟等の御注意を受けんが為後輩達が筆を取るのであります」とは本誌創刊号の弁であるが、本誌復刊に賛同したのもこうした場所の必要性を切に感じていたためである。まず書いてみることに、そして他人の批評を得ること。この繰り返しかそ研究の力と研究に不可欠な人脈を作り出すのだ。本誌は練習の場である。気負わず利用してもらいたい。そして、これをきっかけに先輩・後輩・同期生の間での議論を深め、切磋琢磨されることを望む。

若木考古 第九十七号

平成一六年五月二二日

編集人 中村 耕作
発行人 西谷 昭彦

國學院大學考古學會

東京都渋谷区東四 一〇 二八